

5	小牧	小牧市立応時中学校	フジオカ ダイチ 藤 岡 大地
分会番号	1 2	分会名	自治的諸活動と生活指導（中学校）

『豊かな人間性を育む特別活動の創意工夫』

～児童生徒の思いや願いを生かした学校生活を創る活動を通して～

1 はじめに

近年、社会の急激な変化に伴い、生徒を取り巻く人間関係は希薄化や自己肯定感の低下が課題と指摘されている。特に、多様な他者と協働しながら価値を創造する体験の不足は、生徒の社会性や主体性の発達に影響を及ぼしている。特別活動は、学習指導要領において「集団生活の向上を図る活動」と位置付けられ、望ましい人間関係の構築や集団の一員としての自覚を育む要である。しかしながら、学校教育の現場では、生徒が「自分たちの生活を自分たちで創っている」という実感を持ちにくいという課題がある。そのため、生徒会活動、行事等の特別活動を起点として、異学年との交流や相互理解を促進する場を再構築する必要があると考える。生徒の思いや願いを学校生活の創意工夫に生かす活動を通し、生徒の自治的活動を活性化させる。このプロセスを経て、自己有用感を高めるとともに、多様な他者と協働してよりよい人間関係を形成する児童生徒を育成したいと考えた。

2 目指す生徒像と研究の仮説

（1）目指す生徒像

さまざまな価値観をもつ仲間とともに協力することで、よりよい関係性を築いたり、目標達成のために努力したりすることのできる生徒

（2）研究の仮説

- 【仮説Ⅰ】 学級の諸問題等を話し合う活動や学校行事、異学年との交流を意識した場の設定や工夫をすることで、さまざまな価値観をもつ仲間と協力し合い、よりよい関係性を築くことができるであろう。
- 【仮説Ⅱ】 生徒の意見や思いを反映した目標を設定し活動の過程を自覚的に振り返ることで自己理解を深める。これを繰り返すことで主体的に挑戦し続ける姿勢を育むことができるであろう。

自覚的に振り返らせるとは、単なる活動の感想にとどまらず『自分の行動を客観的に見つめ、その良さや課題を自分で見つける』、生徒が自らの取り組みを『自分なりに整理し、次のヒントを見つけること』を自覚的な振り返りとする。

（3）研究の手だて

<手だて①：仮説Ⅰについて>

ア 交流と責任の場づくり

縦割り活動や異学年交流など、協働させられる場を設定する。また、役割や責任を共有させ、合意形成の必要性や責任感をもたせることでより良い関係性を築かせていく土台とする。

<手だて②：仮説Ⅱについて>

ア 願いと行動を結ぶ目標設定

「自分はどう在りたいか」や「どんなことができるか」を目標設定させることで、諸活動に対して自分事として捉えられるようにさせる。

イ 自覚的な振り返りの工夫

活動後の振り返りにおいて、単なる活動の感想にとどまらず、「成果」を分析し「意志」の言語化を促すことで、児童生徒自らが課題を認識し、次なる目標の自律的な設定につなげさせる。

3 研究の実際

(1) 研究の方法

- ① 体育祭の種目・運営方法を生徒とともに決定
- ② スタッフ制の継続とブロック制の導入
- ③ 体育祭・文化祭後のアンケート
- ④ QUテスト（年2回）による関係性の変容の測定
- ⑤ 振り返りの共有と次年度への改善

①から⑤を順次行い、生徒主体の活動と異学年交流の両面から手だて①と手だて②を検証する。

(2) 研究の実際

① 体育祭における異学年交流を意識したブロック制の導入

本校では以前より、体育祭において生徒主体のスタッフ制を導入してきた。競技運営・放送・用具・記録などの役割を生徒が担い、異学年が協力して体育祭を支える仕組みである。ここでは、上級生が下級生に仕事を教える、役割を通して自然に会話が生まれる、責任感や自己有用感が育つといった「機能的な協働」が中心であった。それに加えて今年度は、兼ねてより生徒会執行部が望んでいた交流に重きを置き、競技そのものを異学年で協力して行うブロック制を新たに導入した。初めてのブロック制に戸惑う声も挙がったが、意欲的にとらえる生徒も多く見られた。交流をしていくうえで3年生が中心となり、【写真1】のように各ブロックのテーマを考えたり、応援歌を作ったりするなど、協働的に活動しようと工夫をし始める姿が見られた。

9月からは、実際の種目の練習が始まった。交流種目の内容は、生徒にアンケートを取って決定された「玉入れ」、「子増やしリレー」、「綱引き」の3種目である。【写真2】のように各ブロックで作戦を考え練習に取り入れたり、休み時間等を使って下級生に伝えたりする上級生の姿が見られるようになった。体育祭後の生徒の振り返りには、以下のような記述が見られた。

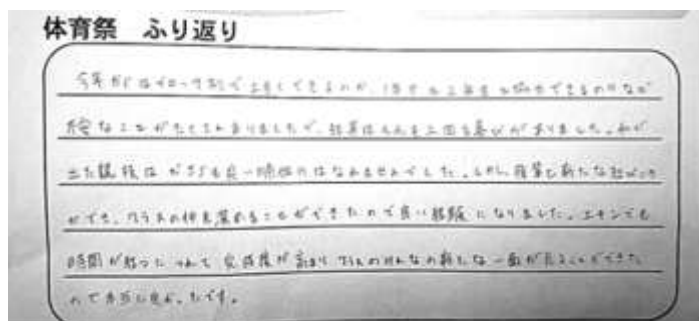
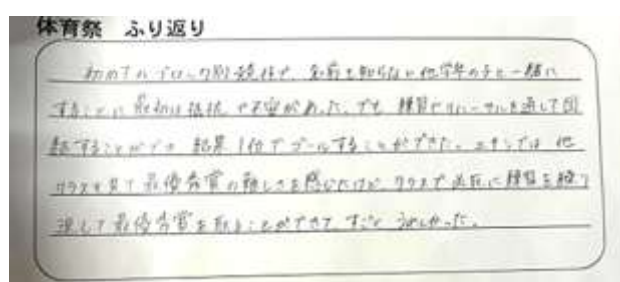
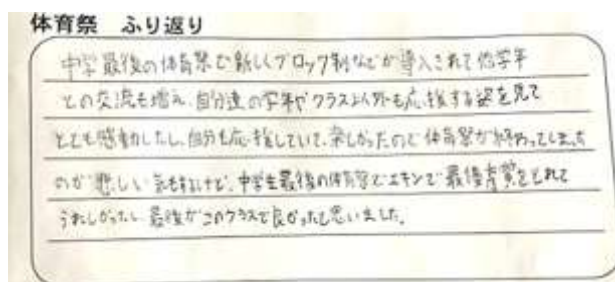
【写真1 交流種目やブロックのテーマについて話し合う生徒の様子】



【写真2 交流種目の練習の様子】



【資料1 生徒の体育祭後の振り返り】



【資料2 体育祭後のアンケート】

【資料1】では、「名前も知らない他学年の子と一緒にすることに、最初は不安があった。でも練習を通して団結できた。」「新たな結びつきができ、クラスの仲も深まった」「他学年の応援に感動した。最後がこのクラスで良かったと思った」など、体育祭後の振り返りから、交流を通して協力の大切さを感じ、よりよい関係性を築くことができたことが分かる。また、体育祭後に行った【資料2】のアンケート結果から、ブロック制での体育祭に関して「たいへんよい」、「よい」と答えた生徒の割合が81%となり、交流を通して有意義な体育祭にすることができたことが分かる。また、その理由として「普段喋らない人と喋ることができるいい機会だったから」「学級、学年を超えた関わりでたくさん協力することができた」などの意見が挙げられた。これらの意見は、ブロック制が「感情の共有」や「価値観の相互理解」を促す交流を生み出したことにつながったからだと考えられる。このようにブロック制を取り入れたことで生徒は従来のスタッフ活動では関わる機会が少なかった異学年の仲間と共通の目標に向かって活動する経験を積むことができた。特に、応援歌の作成や作戦会議では学年を超えて自然な対話が生まれ、互いの考えを認め合いながら活動する姿が見られた。生徒同士が主体的に声をかけ合い、役割を補い合う場面が増えたことから、交流の場を意図的に設定したことが人間関係づくりに有効に働いたと考えられる。この経験は体育祭だけで終わるものではなく、その後の文化祭における交流活動へとつながる基盤となった。

※今年度取り入れたブロック制による体育祭はどうでしたか。(0点満点)

● たいへんよい	216
● よい	164
● どちらでもない	49
● 悪い	29
● すごく悪い	8



去年はほかの学年が競技をしているときはあんまり応援する気にならなかったけど、今年はブロック制で3学年みんなが仲間なので、すごく団結したように感じました。

他学年との交流が多くて普段喋らない人と喋れるいい機会だったから

同じ色で一体感がでたから

学級、学年を超えたかがわりでたくさんの協力を味わうことができました。

② 文化祭における異学年交流を意識したブロック制の導入

体育祭で築いた関係性を文化祭にも波及させるため、体育祭と同様に従来のスタッフ制を行った。また、展示鑑賞をブロック制で行うとともに、合唱コンクール前日に、ブロックごとの合唱交流を行った。【写真3】のように、交流合唱の時間を生徒主体で進行させて互いの合唱を認め合ったり、アドバイスをし合ったりすることで有意義な時間とすることができた。文化祭後のアンケートや生徒議会では、「交流合唱を通して体育祭で取り入れられたブロックのクラス合唱を聞くことができ、より仲間意識が高まった」「合唱交流を通して学ぶことが多くあった。できればもう少し時間を取って行っていきたいと感じた」、「文化祭前日だけでなくもっと交流ができるとよりよいものになるのではないか」などの意見が挙がり、交流を通して互いに刺激を受け合ったことが、交流クラスとの関係性に大きく影響したことが分かる。また、合唱交流を行った各ブロックの教員からは「合唱コンクールへの意欲向上につながった」との声もあり、生徒の意欲や関係性に好影響を与えたと考えられる。また、文化祭後には【資料3】賞賛を表す掲示物を作成したり、交流に対するお礼を自発的にし見られ、よりよい関係性の構築につながった。文化祭後の生徒の見られた。

【写真3 交流合唱の様子】



【資料3 他学年へのお礼や掲示物】



【資料4 生徒の文化祭後の振り返り】

1位 合唱	2位 交差練習	3位 鑑賞会
一位を取りとれてき なれたが、後の低年齢 組は愛情と夢がたくさん つまっている。	今年の合唱は今までに ない迫力を感じた。妹 とこれこそアレンをかせ ていこうと僕が思った。	参考になる作品がい くつあり来年の美術 競演会に取り入れお と思った。

1位 合唱	2位 美術 20-7	3位 美術 20 鑑賞
銀雲を梅のしらべ、3曲の 合唱と聞、17、某年1月 自分達も3曲のしらべ 17、18、19、	2年連続で、その5、 無敵のしらべ、17、年時17 早く、そのしらべ、17、18、	そのしらべ、17、18、19、 そのしらべ、17、18、19、 そのしらべ、17、18、19、

台詞、コーラルの音と船の音とが混ざって、どろどろと、グザグザの、
年生と交差した。全員が一生命に情熱を注ぎ、クラム・エイト、
青い鳥を作った。かくとかくと、たのしみ、たのしみ、
家庭科部、日曜を展示するために、合唱、合唱、作っている、
その日、合唱、その日、生かして、たのしみ、たのしみ、

【資料4】から合唱での交流やスタッフ活動を通して、体育祭とは異なる形で「豊かな人間性」が育まれたことが読み取れる。生徒は合唱づくりを通して、学級の仲間と協力して一つの作品を創り上げる達成感を味わっている。さらに、振り返りにもある「3年の合唱は、今までにない迫力を感じた」「3年

生の合唱を聞いて来年は自分たちもこうなりたい」「来年の美術競技会で取り入れようと思った」など、異学年との交流や日ごろの努力が認められる経験は、自己有用感や共感性の向上につながっている。体育祭が「協働の中で関係性を築く場」であったのに対し、文化祭は「表現を通じて自己と他者を見つめなおす場」となり、生徒に大きな影響を与えることができた。体育祭で築かれた異学年の関係性があったことで、文化祭では初めて交流するという意識よりも「一緒に活動する仲間」として自然なかかわりが見られた。交流合唱では互いの発表を認め合う姿勢や展示鑑賞では他学年の作品

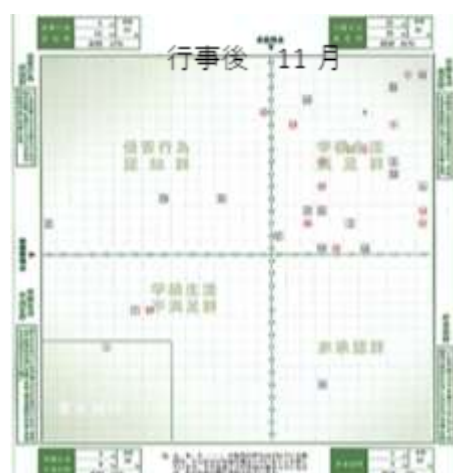
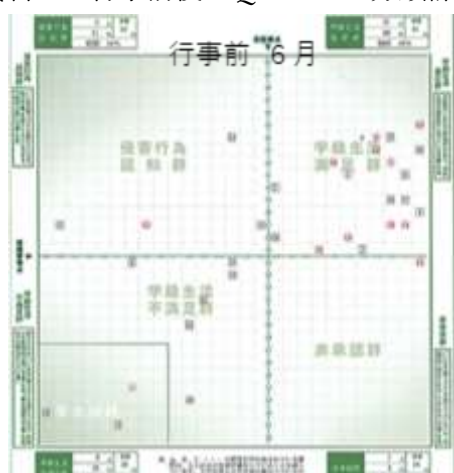
から学ぼうとする姿が見られ、交流の質がより深まったと考えられる。体育祭と文化祭を関連付けて実践したことにより、一つ一つの行事が独立した活動ではなく、生徒の人間関係や自治的な態度を継続的に育む教育活動として機能したことがうかがえる。

4 成果と考察

(1) 生徒の意識変化による成果

体育祭や文化祭後の生徒の振り返りから、「不安の克服」「協働による達成感」「他学年への信頼」「新たなつながりの形成」といった変容が読み取れる。これは、ブロック制による交流や学級での協働を通して、よりよい関係性を築いたり、努力したりすることにつながったからこそであるといえるだろう。これにより、生徒の豊かな人間性を育むことができたと考える。本学級で6月と11月に行ったQUテストでは、【資料5】のように、行事前の6月と行事後の11月のクラスの関係性に変化が見られ、意欲的に取り組むことのできる生徒が増えていることが分かる。交流や学級での価値観の違う生徒同士が関わり、お互いに認め合うことが大きく影響しているといえる。また、【資料6】を見ると、行事前後では、生徒の意識に大きく変化が見られた。特に、学級生活満足群の値は60%から76%へと増加、不満足群についても28%から9%への低下が見られる。行事での交流を通して、自己肯定感や自己有用感を向上させたことにより、生徒の心理的安全性や関係性の質が高まったと考えられる。この結果は、行事そのものを楽しめたという一時的な感情だけでなく、異学年交流や役割活動を通して「自分が認められた」「仲間に貢献できた」という自己有用感や所属感が高まったことを示していると考えられる。特にブロック活動では学年を超えて互いを支え合う場面が多く見られたことから、安心して他者と関われる環境づくりにつながり、学級生活への満足感にも好影響を与えたものと考えられる。

【資料6 行事前後のQUテスト分類群の変化】



【資料5 QUテストにおける学級との関係に関する項目の比較】

学級との関係			学級との関係		
13	14	15	13	14	15
自分のクラスは仲の良いクラスだと思える	自分のクラスは仲の良いクラスだと思える	自分のクラスは仲の良いクラスだと思える	自分のクラスは仲の良いクラスだと思える	自分のクラスは仲の良いクラスだと思える	自分のクラスは仲の良いクラスだと思える
40.0	25.7	42.9	50.0	57.0	60.0
48.6	40.0	37.1	57.3	54.3	50.0
8.6	34.3	8.6	9.1	9.3	6.1
2.9	2.9	8.6	3.0	6.1	3.0
0.0	5.7	2.9	0.0	3.0	0.0
84.2	38.1	51.7	44.2	38.1	51.7
22.2	30.6	26.3	32.2	30.6	26.3
16.0	19.4	14.9	16.0	19.4	14.9
4.8	6.6	4.2	4.8	6.6	4.2
2.8	5.3	2.9	2.8	5.3	2.9
6月			11月		

(2) 仮説の検証

① 仮説Ⅰについて

仮説Ⅰでは、「異学年との交流を意識した場の設定や工夫をすることで、さまざまな価値観をも

つ仲間と協力し、よりよい関係性を築くことができる」と考えた。本研究では、手だて①として、体育祭では従来のスタッフ制に加えてブロック制を導入し、競技だけでなくテーマ決定や応援づくり、練習などを異学年で行う場を設定した。また、文化祭では交流合唱や展示鑑賞をブロック単位で実施し、互いの活動を認め合う機会を設けた。その結果、【資料1】や【資料4】の振り返りには、「他学年と仲良くなれた」「新しいつながりができた」「クラスの仲も深まった」といった記述が見られ、【資料2】のアンケートでも81%の生徒がブロック制を肯定的に評価した。さらに、QUテスト【資料5・6】では学級生活満足群が60%から76%へ増加し、不満足群は28%から9%へ減少した。これらの結果から、交流の場を意図的に設定したことが、異学年との関係づくりだけでなく、学級内の安心感や所属感の向上にもつながったと考えられる。一方、スタッフ制では役割を通して責任感や機能的な協働を育み、ブロック制では競技や合唱など共通の目標に向かって活動する中で感情や達成感を共有する協働が生まれた。両者を組み合わせたことにより、異学年交流が量的な広がりだけでなく質的な深まりへと発展したことが分かり、仮説Ⅰは概ね支持されたと考える。

② 仮説Ⅱについて

仮説Ⅱでは、「生徒の意見や思いを反映した目標を設定し、自覚的な振り返りを繰り返すことで主体的に挑戦し続ける姿勢が育つ」と考えた。本研究では、手だて②として、「自分はどうかいたいか」「どんなことができるか」という視点から目標を設定させるとともに、活動後には成果だけでなく、自分の行動や仲間との関わりを振り返る場を設定した。【資料1】や【資料4】には、「最初は不安だったが交流できた」「来年は自分たちもこうなりたい」「もっとよい合唱にしたい」など、自分自身の変容や次の目標につながる記述が見られた。これは単なる感想ではなく、自分の行動を客観的に見つめ、課題や成長を整理する自覚的な振り返りが行われたことを示している。さらに、文化祭では体育祭で築いた関係性を基盤として主体的に交流活動や掲示物作成、お礼のメッセージ作成などに取り組む姿も見られた。これは、振り返りを通して得た気づきが次の活動への意欲につながり、自ら挑戦しようとする姿勢として表れたものと考えられる。以上のことから、目標設定と自覚的な振り返りを繰り返したことが、生徒の自己理解や主体性を高め、仮説Ⅱについても一定の成果が得られたと考える。

(3) 研究のまとめと今後の課題

本研究では、体育祭及び文化祭において異学年交流を意図的に位置付けるとともに、目標設定や振り返りを取り入れることで、生徒の自己有用感や主体性の育成を図った。その結果、生徒同士の関係性の向上や学級生活満足群の増加など一定の成果を得ることができた。一方で、本研究は一年間の実践を対象としており、自治的な態度や自己有用感が長期的にどのように育まれていくかについては十分に検証できていない。また、対象となる学校行事も体育祭と文化祭が中心であり、生徒会活動や学級活動、日常の学校生活にまで実践を広げることで、さらに継続的な効果を検証する必要がある。今後は、学校行事を単独で捉えるのではなく、年間を通した特別活動全体の中で各活動を関連付けながら、生徒が「認められる経験」「役に立つ経験」を積み重ねられる教育活動を計画していきたい。また、生徒一人一人の変容を継続的に把握しながら、自治的活動を基盤とした豊かな人間性の育成について、さらに実践と検証を重ねていきたい。